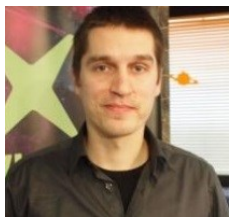


《エポケー》の必要

生活でも愛でも思考でも行き詰ったら、いっぺんチャラしてみるのがいい。ゼロから出なおすのである。というのは、よく言われるせりふだが、実際にはなかなかむずかしい。行為には相手がいるから、自分だけさっぱりしても、今度は相手を追い詰めたりするからだ。

いくつかの国際映画祭で話題になったペトリ・ルック・カインの自作自演ドキュメンタリー「365日のシンプルライフ」は、彼のアパートメントにあふれた物品を一旦すべてなしにして、以後1年間、物を一切買わずに生活してみようという「自主実験」の記録である。



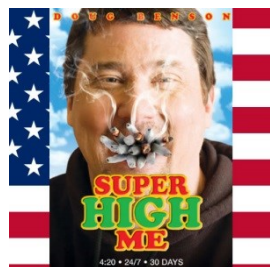
面白いのは、すべてを捨ててゼロから出すのではなく、持ちものを全部トランクルームに預けるといってやりかただ。実際にベッドカバーにくるまるだけの素裸の生活から始める

が、無理してそれを続けるのではなく、寒くてたまらなくなったら、翌日はオーバーコートを取っていく。ガランとしたアパートメントを見にきた母親が、「お願いだから冷蔵庫だけは使っちゃうだい」と懇願すると、それまでは、ミルクやオレンジジュースなどを窓の外（フィンランドの冬は寒い）に置いていたのをあらため、弟の手を借りてトランクルームから冷蔵庫をとりもどす。



こういう調子だから、「自主実験」ドキュメンタリーといっても、マクドナルドを30日間食べ続けてみる「スーパースイズ・ミー」(04)のド根性を期待し

ても無理である。また、その半パロディ版で、ハンバーガーの代わりにマリワナを毎日吸ってみるといふスタン・ドアップ・ノメディアン、ダグ・ベンソンの「スー



ハイ・ミー
ー(07)
の爆笑
的ユー
モアや
政治性

は全くない。また、「シンプルライフ」といつても「地球にやさしい生活」(09)のように、その結果記録を本や映画にして金儲けしようといった野心は感じられない。

では、どこがユニークかというと、いわば《エポケー》の技法を持ち込んでいる点である。エポケーとは古代ギリシヤの「懐疑派」が用いた手法で、哲学用語としては「判断停止」と訳される。ちなみに、この語はいま「思考停止」と混同されるので注意がいる。

エポケーは、「脳天気」ということではなくて、デカルトの「方法的懐疑」(すべてを一度ないものと仮定して思考する)やフッサールの現象学の主要概念のひとつに直結する。

それは、要するに、《括弧にいれる》

ことであるが、この映画でペトリが家財道具をトランクルームにいれるのがまさにこの「括弧いれ」なのである。重要なのは、チャラにすることではなくて、いったん括弧にいれて全体を反省してみることなのだ。

反省の結果は、別にたいしたことが起こるわけではない。大きな変化があるとすれば、自転車の鍵をなくしてしまった女性のU字型錠を切断してやったのが縁で新たな愛が生まれることぐらいである。



戦前の質素な生活を知るつつまじやかな祖母は、「女にとつて物は小道具のようなのだから」と言う

シーンが妙に感動的だとすれば、それは、この映画が本来はごくあたりまえの現実の素直な再発見だからである。

Tavarataivas/2013/Petri Luukkainen